

滋賀建設会だより

第3号 滋賀建設会

びわこ・くさつ キャンパス移転 20周年記念

会長 山岡和則

滋賀建設会会長の山岡和則です。日頃は滋賀建設会の活動にご支援をいただきありがとうございます。

立命館大学理工学部は、1938年（昭和13年）に立命館高等工科学校として設立され、74年間衣笠キャンパスで歴史を刻み、1994年（平成6年）にBKCへ移転し、2014年で移転20周年を迎えます。我が「滋賀建設会」の名称を、一昨年「滋賀衣笠会」から変更しました思い等が重なってきます。現在、理工学部では学部生300名、院生100名が学び、理工系学部全体では4学部で800名、大学院で1500名の規模となっております。

理工学部では今回の20周年を契機に、新たな教育研究環境の充実を図り、基礎科学のさらなる充実、環境等への一層の取り組み、国際的に羽ばたく人材の育成等を目的に、各学科の事業が計画されています。環境都市系学科（建設系の学系）では「びわこ国際人材育成プログラム」を計画されており、最先端の研究に取り組める環境整備と琵琶湖から世界にはばたく人材育成からなると聞いています。

これらの事業展開の一助となるために、卒業生や先生等のお声がけによる学部全体としての募金活動が準備され、滋賀建設会にもお声がけがきております。私たちの後輩のため、20周年を記念し、少しでも力になれたらとの思いで、会員の皆様から募金のお声がけさせていただこうと考えます。改めて大学建設会等からの募金趣意が発信されるとお聞きしますので、よろしくお願いいたします。

滋賀建設会の今年度の総会懇親会は、従来の7月開催に照準を合わせ、なおかつ、「名簿」と「たより」の作成をこれに間に合わせようと、多く

の役員の皆様にご無理をお願いしました。さらに、参加者50名以上を目指して、声かけを進めています。こんな取り組みを進める中、一歩ずつ滋賀建設会のネットワークを広げております。また、さらなるネットワーク展開にも取り組みたいと考えますので、よろしくお願いいたします。

資源循環の拠点 「リサイクルセ ンター木戸」 53年卒 須永啓之 (大津市勤務)

大津市が中核市へ移行することに伴い、産業廃棄物に関する事務を滋賀県から委譲されることになり、まるで隕石にでも当たったかのように、廃棄物の世界に足を踏み入れることになりました。一寸先は分からないものです。

「ややこしい！」と言ったのがこの世界の第一印象でした。まず法律の名前が「廃棄物の処理と清掃に関する法律」と長い。そこで、現場では「廃棄物処理法」とか「廃掃法」と呼んでいます。次に用語です。処理とか処分とか、似たような言葉があります。廃棄物（以下「ごみ」とします。）を燃やしたり砕いたりすることは中間処理で、埋め立てることを最終処分とすることは分かるのですが、収集運搬（集めたり運んだりすること）も処理に含まれることが馴染めません。

基準値に対するこだわりも、土木とは全く異なります。水質等については規制値をO・ppm（一千万の1）を超えるかどうかで議論を交わすのに、埋め立て処分地の安定勾配に対しては三十度でも四十度でも崩れるわけではないので大して変わらないでしょうと、気にもとめてもらえません。

また、他人のごみを運ぶには許可が必要とされ、「ついでに持って行くわー」頼むわ。すまんのー」という、業者間の仲間意識は成り立たないのです。

一方、ごみを燃やした（中間処理）後に残る灰は燃やした人（処理した人）のものではなく、依然としてごみを出した人のもので、適正に埋め立て（最終処分）が完了するまでは、ごみを出した人には処理責任が付いて回る仕組みは、気をつけなければなりません。

更に、産廃に該当するかの判断が、またやつかい。今までは気にも留めなかったものが、実は産業廃棄物であり、不適切な処分をしている場合があります。例えば、地中に埋設した矢板や建築物の基礎杭、また道路や駐車場を高上げするときに、地中に残した既設のアスファルト舗装も産業廃棄物になります。道路改良工事から発生した路盤材（再生砕石、砕石（自然石）も、埋め戻しが出来なくて余ってしまった産業廃棄物になります。舗装切断のときに出る排水も産業廃棄物になります。あー、ややこしい！

そんな思いが通じてか、今年の4月に、旧志賀町役場の近くにオープンした、施設サイクルセンター木戸に異動となりました。ここはリサイクル、リユース、リサイクルの3R（スリーアール）を推進し、ごみ減量や資源循環を啓発していく拠点施設です。家庭で不要となった子ども用品を展示し、必要とする方に提供する「リユースコーナー」を始め、不要となった物の再利用方法を学ぶ教室などを定期的に開催しています。4月は受講生を含め約900名の方にご来場いただいています。今後はさらに多くの市民の皆様にご利用いただき、ごみ減量意識の向上につなげてゆきたいと考えています。

リユース品として頂くおもちゃの中に、時々ダンブパーやショベルカーなどの建設機械を見つけたら、「土木屋だった！」と思いつく今日この頃です。

平9年卒 黒田 徹 (株)昭建勤務)

2、3年前に一度作文させていただいたのですが、またもや掲載の機会をいただきました。非常に困っています。時間がありません。最終締切りが明日ということなので、現行の書類などはひとまず置いといて、作文に着手することとします。



というわけで右の写真は、先日あった名神集中工事に参加する前に現場代理人として担当していた栗東水口道路小野西改良工事のものです。平成24年6月～平成25年3月末までを工期とした国土交通省さんの発注工事でした。てんこ盛り協議書類を作ったのですが、結局協議した本体工事は訳あって全中止となり、最後の年度末に超突貫舗装工事をする事になったという伝説？の工事です。橋面及び土工部あわせて約2.2万㎡を超える排水性舗装工事の一部に約2kmの路床安定処理工（スチライザー）があり、右はその写真となります。数量的には上記にくわえて排水構造物が720m、橋梁防護柵が約1.5km、橋面防水が約5kmといった具合でした。私自身は変更工事の協議書類や数量計算書及び図面の作成などで精一杯な状態で、恥ずかしながら現場はお任せ状態でした。しかしながらそこは昭建スタッフ、監理技術者を筆頭に各自がやるべきことをきっちり把握していたことで、私の出る幕などほとんどなくて、感覚としては自動的に仕上がっていったという感じでした。評

価点も80点以上を達成。みなさんありがとうございました。一人でもできることなんてたかがしれていますが、力を合わせれば不可能だと思えることでもできたりするんですね。

次は栗東水口の前に監理技術者として担当した栗東市さんの発注工事である山川3・8号雨水幹線整備工事の2工事の写真です。



1個当たり約10tのボックスカルバート(B200 x H200)を195個、約370m設置するというものでした。工区も上流側で単工種とあってかなり楽観していたのですが、そうそう旨い話はなく例のごとく問題だらけでした。列挙すると、当工区の下を通行止めなしで横断する必要があり、しかも入口がその1箇所だけしかない。地盤が悪く製品搬入のためには施工延長分の通路養生が必要。隣接して既設構造物があるなど利用可能幅が狭く施工に必要な50t級クレーンを据付けするスペースがない。地域一帯の水が当工区に集積してくる上、水替にしくじれば下流工区にも影響する。当工区内に別工事の作業通路があるなど、隣接工事が多数あり相互にリンクしているため調整が必要。追加工事として、最上流部迂回水路の取壊しとU型水路(U-2700 x 200)による既設水路への接続を指示された。などなどです。主体となる施工方法については即決で、全施工延長について敷鉄板に

よる通路を設置し、45tクローラクレーンによりBOX設置を行うこととしました。細部については協力業者さんと密に打合せし、無駄のない土工作业ができましたし、BOX設置についても狭所部ではフォークリフト工法を、架空線下ではベアリング工法を併用するなど臨機応変に対応できたと思います。ただ後々まで尾を引いたのがとてました。時間1mm程度の雨が10分ほど降っただけで30分も経たずにBOX接続予定の農水路から大量の雨水が流入してきた時には本当に驚きました。着工して間もなくのことだったので、それを皮切りに水との戦いが始まり、大口径BOXが必要なる理由を思い知ることになります。隣接工事との関係で下流から上流に向かっている施工ができず、歯抜け状態での施工を余儀なくされたことやゲリラ豪雨の多い年だったこともあり、5箇所以上で発電機を設置し6時4時ポンプを大量に投入する事態となりました。また、事業の全体的な遅れにより工事が集中してしまつた結果、毎週のように工程を組み直さなければならなかったり、更には同市発注の隣接工事を進めるためには、当工区を含む下流工区が施工途中であり放流できない状態であるにも関わらず、最上流部の迂回水路の撤去と当BOXと既設水路をつなぐU型水路の設置を早急に行う必要が生じ、実際、自分の首を絞めるような状態が最後まで続きました。嫌がらせのようにやってくるゲリラ豪雨にはかなう訳もなく、表面水の集積だけで鉄板通路は川となり、上流部に施した対策は易々と突破され何度でも大口径BOXが満水になる光景を見ることとなりました。そんな苦しい中でも皆の協力が私の往生際の悪さの甲斐あって無事に発注者さんの希望に添うことができ、評価点も利益も当初目標を大きく上回ることでできました。オチとしては、この現場での勤務体制について後でこつこつと叱られる羽目になり、この時心が一気に10年以上年老いたと思えます。現在、これを機に社内には何人かいる仙人を見習ってペースダウンを試みているところです（終了）。

福井県出向を

終え 平13修 足立憲悟

(滋賀県勤務)

筆者の来歴

設計コンサルタント会社に7年間勤務し、平成20年度から滋賀県に奉職しております。最初の勤務地は彦根の土木事務所、道路の設計や工事を担当しました。3年間の彦根勤務を経て平成22年度末、最初の異動を迎えて期待と不安に包まれていたところ、思いも寄らない福井県出向の打診。まさに青天の霹靂でした。というところで、筆者は滋賀県職員にして、滋賀県庁での勤務より福井県庁での勤務を先に経験するという奇妙な経歴を得ることになりました。ここでは、平成23、24年の2年間お世話になった福井県について、色々ご紹介したいと思います。

福井県のいろは

福井県は、「近江国」滋賀県とは異なり、「越前国」と「若狭国」からなっているため、その名残が随所に見られます。明治の廃藩置県の中で分割統合が何度か行われており、敦賀市以西は滋賀県に、敦賀市以北は石川県に編入されていたこともあったようです。福井の人は、今でも敦賀市以西を嶺南、以北を嶺北と呼んで県を大きく二つに分けて認識しています。嶺北と嶺南では方言もかなり違います。いわゆる福井弁は嶺北の方に強くみられ、嶺南の方は関西弁に近く聞き取りやすいのが特徴です。

福井県の人と仲良くなってくる、お酒の席で「あいつは嶺南の人やで、なんやって」とか、「あの人は嶺北の人やし、なんや」とか愚痴を聞けることがあったりします。

おどろきの福井県

筆者が福井県に住んで驚いたことは、地元新聞が2誌もあるが、民放テレビが2チャンネルしかないこと、雪の量と頻度がすごいこと

があります。

メディアは完全な地元密着型で、2チャンネルしか映らない民放局も、福井テレビと福井放送です。新聞・テレビは、地元関係の情報の手厚く、全国的な情報は若干手薄になる傾向があります。その事例として筆者が実際に見たのが次のようなニュースです。「全国都道府県別対抗の駅伝大会が月日、県で行われまし

た。」福井県は、男子の部、女子の部は、位でした。「では、次のニュースです」「何が面白いのか、皆さま気づかれましたでしょうか？」

筆者は、「滋賀県は何位だったんだろう」と思いを巡らせながら、「何か違和感を持っていました。そして気づいたのです。ここは関西人、即座にテレビに突っ込みました。それで、どの県が優勝したんだよ」と。お解りいただけただけでしょうか？

雪については、滋賀県でも山あいには豪雪地帯がありますが、福井県では、福井市内の平地部でも大雪に見舞われることがあります。筆者がいた2年間でも、職員住宅(県庁から自転車20分)の駐車場まで積もることもしばしばあり、最大では腰まで積もったことがあります。前年の平成22年には、福井市内で一晚60cmの積雪を記録したこともあったそうです。

また、量もさることながら、より驚いたのはその頻度です。朝に家を出るときに晴れていても油断してはいけません。県庁に着くまでの20分の間に、みぞれが降り出すことが普通にあります。北陸地方では、「弁当忘れても傘忘れるな」というのが定番のフレーズになっ

福井県での仕事

筆者が福井県で配属されたのは、高規格道路推進課というところで、国や高速道路会社が行ういわゆる高速道路事業の調整関係やスマートインターチェンジ、地域高規格道路を担当している部署です。2年間で、2路線の高速道路の延

伸開通、2箇所のスマートインターチェンジの事業化に立ち会うことができ、濃密な期間を過ごしました。我ながら、良い経験になったと思います。若い方(若くない方も)は、違う組織での仕事の経験は得難いものだと思いますので、機会があれば積極的に参加されることをお勧めします。

滋賀と福井のこれから

福井県では、北陸新幹線の金沢市から敦賀市までの延伸が、昨年(平成24年度)ようやく国の認可を受け、着工されました。これから設計、用地、工事と進められ、開業は平成37年度が予定されています。東海道新幹線の開通が昭和39年です。遅れること約60年となります。

高速道路では、北陸道が昭和55年に名神に接続されていますが、舞鶴市と敦賀市を結ぶ舞鶴若狭道や、岐阜の郡上と福井を結ぶ中部縦貫道は、やっと全線開通が視野に入ってきたところです。

これらのように、福井県における国家レベルのインフラは、立地に恵まれた滋賀県と違い、遅れに遅れている印象は否めません。しかし、福井市内をはじめ4車線化された道路は多く、一般道路の整備はかなり進んでいる印象を受けます。国道1号でさえバイパス化が進まない滋賀県とは大違いです。地方で出来ることを頑張ってきた証しのように思われます。

滋賀県としても見習うべきところが多くあるように感じましたので、福井県で経験したことを活かして、より良い滋賀県にできるような努力していきたいと考えています。

新たな三方よしへ

平13修 石原成樹 (近江八幡市勤務)

自己紹介

私は、建設コンサルタント会社で6年半お世話になり、平成19年10月より近江八幡市役所に奉職しており、公務員として6年目を



迎え、民間での期間と公務員としての期間が丁度半々を経験させていただいたことになりました。公務員という立場が世間から非常に厳しい時代を迎えておりますが、コンサル時代の失敗や経験は非常に大きく、一人の土木技術者として、小さな雛鳥を温かく育ててくれた私の「ふるさとのような存在」といまでもお感謝の念を忘れられない今日この頃であります。そんな中、市役所においては、度々異動(都市計画課、教育施設整備推進室)を迎え、現在は政策推進課という部署に配属されておりますが、当課は基本的に事務方の業務が多いこともあって、土木技師は私一人という体制の中で日々奮闘しております。現在の私の主な任務として、ある学区のコミュニティエリア整備事業というところで、小学校、コミュニティセンター、児童保育所の施設を一体整備(新設移転:4ha)し、既存施設の跡地利用、道路網整備(約1km)を並行して進めるとい、当市においては一大事業に調整役として携わっております。工程が非常にタイトで所轄が多岐にわたることとあって、プロジェクトチーム(約20名)を結成し、工程計画を幾度も練り直しながらチームが主体となって進めております。ようやく設計業務を発注する段階に入り、今回は設計コンペに近い公募型のプロポーザル方式を採用することにいたしました。これまた初めての経験になりました。貴重な経験をさせていただくこととなりますが、施設竣工の平成28年4月をめざし、本事業に積極的に関わっていききたいと思っております。

近江八幡市の紹介

平成28年に旧近江八幡市と旧安土町が合併しました。人口約28,000人、31,500世帯、滋賀県のほぼ中央部に位置し、「沖島」は琵琶湖最大の島、淡水湖に浮かぶ日本唯一の有人島となっております。天正11年(1583年)の安土城完成とともに織田信長が居城し、また同13年(1585年)には豊臣秀次によって八幡山(鶴翼山)に城が築かれ、城下町が形成されました。近年は京都・大阪のベッタウンとして市外からの転入住民が多く居住しています。古い「三方よし」から「新たな三方よし」へ。豊かな自然と歴史・文化を活かした社会を形成する。グローバル社会をリードする人づくりの拠点となる。他地域とのネットワークを通じて社会貢献する都市を目指しています。



近況報告

事務局 川又英史

事務局より平成28年6月までの近況を報告いたします。昨年度は、2年毎に開催される立命館大学建設会の総会懇親会が6月27日に京都タワーホテルで開催され、滋賀建設会から約20名が参加いたしました。川那部立命館大学建設会会長が2年の任期を終えられ、新しく大阪建立会の中尾様が会長に就任されました。川那部様には大役大変ご苦労様でした。2月5日には滋賀建設会総会懇親会を開催し、大学の平尾先生、ジョンのウエルズ先生、大

阪、京都、奈良の建設会支部から会長様役員様に出席いただき、約20名の参加者で盛りあげていただきました。今年度の総会懇親会は、従来の「月開催を目指し、また開催にあわせ「名簿」と「たより」を作成しよう」と多くの役員様に無理をお願いしております。また、最近恒例の立命館大学応援団&チアガールの演舞も交渉中であり、大を目指し、一人でも多くの参加を増やそうと、今年度は20人以上の参加者を目標に取り組んでおります。皆様の参加をよろしくお願いいたします。

昨年度、組織を改編させていただき、現在の5部門、総務担当「広報企画担当」「OB担当」「学

年連絡担当」「事務局」に分担し、運営させていただいております。会長 山岡和則(昭和53年卒) 副会長 西村貞雄(昭和44年卒)

堀井信幸(昭和53年卒) 石田良明(昭和55年卒) 馬場敏彦(昭和45年卒) 西村義博(昭和49年卒)

田中伸明(昭和56年卒) 小嶋忠敏(昭和63年卒) 門脇広和(平成13年卒) 南部安賢(昭和53年卒)

木村幹彦(昭和57年卒) 守岡卓蔵(昭和60年卒) 友田昌良(昭和60年卒) 山田千尋(平成11年卒)

服部喜由(昭和50年卒) 山本一正(昭和51年卒) 稲葉 実(平成6年卒) 足立憲悟(平成11年卒)

北川一哉(平成11年卒) 松岡友香(平成13年卒) 村田康行(平成16年卒) 玉木 慎(平成20年卒) 川又英史(平成5年卒) 松延宏昭(平成6年卒)

以上、報告とさせていただきます。